

## 『虎明本』と『狂言六義』における依頼話段の差異

八坂尚美

この発表では、江戸時代初期の狂言台本『虎明本』と『狂言六義』の依頼話段における依頼の始め方の違いについて述べる。

大蔵流の狂言台本『虎明本』と和泉流の狂言台本『狂言六義』を資料に、典型的な依頼の形式「くれる」（「くりやれ」「くれさしめ」等の待遇表現を伴う形式を含む）、「下さる」、「たもる」、「頼む」の現れている用例を抜き出し、その前の文脈を目視で確認する。次に、前文脈の会話をふくめた依頼の型を以下の3つに分類する。

- 1) **Φ型**…依頼者側による依頼に先立つ切り出しのセリフも、依頼のセリフを引き出す聞き手のセリフもないもの。
- 2) **引き出し型**…聞き手による依頼を引き出すセリフの存在するもの。
- 3) **切り出し型**…依頼を行う側による、依頼に先立つ切り出しのセリフがあり、聞き手の応答と依頼を行う側の具体的依頼内容が続くもの。

調査の結果、両本Φ型が最多であることは共通しているが、Φ型以外の部分では違いがあらわれており、虎明本では「引き出し型」が多く、狂言六義では「切り出し型」のみが用いられるという話段構成上の差異が明らかになった。

これは演じ方の手法として、演劇のあらかじめ決められたストーリー展開に沿って、効率的に進行することができる「引き出し型」と、演者があたかもこの後に依頼をされるという展開を知らないかのように振る舞わせることで、筋書きのない自然な会話のように演出できる「切り出し型」という機能の差であると考えられ、各台本の資料性を考える上で見逃すことができない相違である。

このような話段構成上の違いから、虎明本は舞台演劇らしい言葉遣いが前面に出ている一方、狂言六義では自然な会話らしさを写実するという方向性があらわれていると考えられる。